

2021年12月26日

## 畏友 久保和良君の著書を評す

聖賢の書を空しく読むのみならば 人の剣術を傍観するも同じ

— 西郷南洲

群馬大学 小林春夫

久保和良（小山高専 教授）

「量の理論とアナロジー（計測・制御セレクションシリーズ3）」

コロナ社 2021年10月

単なる理工系のテキストにとどまらず、同君の研究者人生の凝縮の著である。もちろん教科書として使用できる内容・体裁を整えているが、長年同君を知っている者としてはこの書はそれ以上に同君の研究の集大成であるように感じる。中では碩学の先達の学説を紹介しておりこの分野を俯瞰するのに有益である。が、百科事典的な羅列ではなく、真意は同君の考えを表現するために引用していると解釈できる。同君が文学と工学の関係を研究対象としていたときには周りから理解を得られるのが難しかったとの話を聞いたことがある。その内容と自身の考えを本書での体系の中で簡潔に記している。負のエネルギーを抑えじっと耐えた表現には迫力を感じるのである。個別の内容、解釈にこれまで自分で気が付かなかったハッとするものがいくつもある。横断科学の視点で相互の内容の関連性の記述に、長年の同君の勉学・思索そして懊悩の余韻までも行間に読むことができる。このような見方・考え方があったのかと気が付かされる。

不世出の大棋士 大山康晴 将棋名人 曰く「アマチュアの方が本を読んで勉強するならば、昔から知られている定跡を編集したものではなく、一流棋士が自分の実戦をアレンジして解説した著書を読むと高段を目指せる」。この言葉を思い出す。本書の読後には満足感を得られ、研究者としての力が一つついたように思う。ソニーOB、元群馬大学客員教授 萩原良昭氏「一流の研究者たらんとするなら一冊は著書を残せ」。蓋し至言であろう。この言葉も想起させられる。玉石混交の情報が氾濫する中で本書は本物であるということを感じる。

洛陽の紙価を高めたらんことを。